W-4

日本語の呼びかけイントネーション

Vocative intonation in Japanese

企画・司会　窪薗晴夫
発表１　溝口 愛「東京方言の呼びかけイントネーション」
発表２　窪薗晴夫「鹿児島方言と甑島方言の呼びかけイントネーション」
発表３　平田 秀「小林方言の呼びかけイントネーション」

ワークショップの趣旨

「呼びかけ」とは人や動物に対して相手の名前を使って呼びかける一語文であり、文法的には平叙文や疑問文と対峙する。日本語はラテン語やブルガリア語、韓国語などとは違い、形態的な特徴（呼格の語尾や助詞）を持たないため、もっぱらプロソディーによって平叙文や疑問文との区別がなされるのであるが、諸方言のプロソディー研究はこれまで単語レベルの分析（つまり「語アクセント」の記述）が中心であったこともあり、体系的な研究はなされてこなかった。とりわけ、人に呼びかける時の「呼びかけイントネーション」(vocative intonation)―次の例の下線部のイントネーション―については、東京方言においても体系的な研究がない状況である。

（例）　お父さん、明日仕事？
　　先生、教えてください。
　　太郎君、止めて！
　　ねえねえ、直子ちゃん。

この状況を打破するために、このワークショップでは語アクセント体系が異なる４つの方言―東京方言、鹿児島方言・甑島方言（鹿児島県）、小林方言（宮崎県）―をとりあげ、フィールド調査をもとにした分析結果を報告する。とりわけ着目するのが次の５点である。

(i)　各方言の呼びかけにいくつのイントネーション型があるか？
(ii)　名詞の語彙的なアクセント型がどのように変容するか？
(iii)　アクセント型の区別がなくなる「中和現象」が起こるか？
(iv)　疑問イントネーションとどのように区別されるか？
(v)　通方言的に見た時、４つの方言に共通する呼びかけイントネーションの特徴は何か。また、どこに方言差が現れるか？その方言差は語アクセント体系の違いによって説明できるか？

発表１では人名の語アクセントに２つの型（起伏、平板）を持つ東京方言の調査結果を報告する。発表２では２つのアクセント型（A 型、B 型）を持つ２つの方言―音節単位の鹿児島方言とモーラ単位の甑島方言―を比較する。発表３では鹿児島方言と同じく音節単位の体系でありながら、アクセント型の区別を持たない小林方言を分析する。これらの３つの発表を通してプロソディー研究の新たな展開を紹介し、またフロアとの議論を通して新たな研究課題の発掘を試みる。

各発表要旨

［発表 1］　東京方言の呼びかけイントネーション（溝口 愛）

東京方言の呼びかけイントネーションは、(a) 辞書形アクセントの強調形、(b) 最終音節の高ピッチ形、(c) 最終音節のピッチ下降形の３つのパターンに分類できる。たとえば起伏型の例では、“なおこ”（HLL）が(a) **H**LL、(b) HL**H**、(c) HL**H͡L**となり、平板型では“なおみ”（LHH）が、(a) L**HH**、(b) LH**H**、(c) LH**H͡L**となる（H=高、L=低。太字はピッチの強調を、H͡Lは音節内のピッチ下降を表わす）。いずれのパターンにおいても起伏型と平板型の対立は保持され、アクセントの中和は起こらない。３つのパターンは、呼びかけの目的や相手に対する感情（怒り、悲しみ等）によって使い分けがなされている。例えば、相手を非難する時は(a) 、存在確認など疑問の意味合いを含む場合は(b) 、相手に依頼をする時や、親近感を表現する場合には(c) のパターンがそれぞれ用いられやすい。

［発表 2］　鹿児島方言と甑島方言の呼びかけイントネーション（窪薗晴夫）

鹿児島方言と甑島方言はともに２つのアクセント型（A 型、B 型）を持つ二型アクセント体系でありながら、前者は音節単位、後者はモーラ単位の体系を持つ。また後者はアクセントの山が二つ現れる（重起伏）という点で前者と異なる。呼びかけイントネーションについては「ピッチの下降」という点で両者は共通していた特徴を示す一方、その現れ方には顕著な違いが見られる。甑島方言ではすべての語が A 型で発音されるようになり(...L**H**L)、アクセントの中和が起こる。鹿児島方言では、A 型語でも B 型語でも、語末の２音節間でピッチ下降が起こるイントネーション型（Ⅰ型）と、最終音節内でピッチ下降が起こる型（Ⅱ型）の両方が観察される。A 型語と B 型語は同じ場面で同じイントネーション型を示すことがあることからアクセントの中和が起こると言えるが、Ⅰ型とⅡ型の２つのイントネーション型を示す点が甑島方言とは顕著に異なる。

［発表 3］　小林方言の呼びかけイントネーション（平田 秀）

宮崎県小林方言は一型アクセントの方言であり、すべての語において最終音節が高いピッチを担う。アクセント型の対立をもたないため、型の区別がなくなる中和現象は生じない。老年層の呼びかけイントネーションは、最終音節が下降音調を担う形で実現され、この音節が重音節であっても軽音節であっても、音節内でピッチが下降する。また、老年層では疑問文に終助詞「-カ／-ケ」が義務的に付与されるため、呼びかけ文と疑問文は形態的に区別される。その一方で、この方言では話者間の差異が大きく、(a) 最終音節が軽音節・重音節の両者で下降の有無の揺れを示す話者、(b)最終音節が重音節の場合のみ下降の有無に揺れを示す話者、(c)最終音節が軽音節・重音節のいずれでも下降が起こらない話者の３タイプが観察される。全体的な傾向として、年齢が若くなるにつれて下降が起こらないパターンが多く見られる。